

2020年度 特別研究推進費実績報告書

2021年 4月 30日

北九州市立大学長 様

(所属・職名) 文学部比較文化学科 准教授
(氏名) 中山 俊

2020年度に交付を受けた特別研究推進費に係る研究実績について、次のとおり報告します。

研究課題名	エジプト表象及びエジプト学へのドミニク・ヴィヴァン・ドノンの貢献—旅行記、美術品収集、その管理方法の考察を通じて—					
実施内容・研究成果の要旨 (概要書を別途添付)	<p>ドミニク・ヴィヴァン・ドノン(1747~1825)とは、スケッチ画家としてエジプト遠征(1798~1801)に同行し、帰国後、旅行記『ボナパルト将軍麾下の上下エジプト紀行』を1802年に出版して、その直後にナポレオン美術館(ルーヴル美術館)の館長に就任した人物である。</p> <p>本研究を通じて明らかになったのは、この旅行記がオリエンタリズムの二項対立図式に収まりきらない見方を有することである。一例を挙げると、戦禍に喘ぐ現地農民を目にしたドノンは、「科学と技芸をもたらす文明化の使命」を掲げてエジプトを占領するフランス軍の行動に懐疑心を募らしさえる。</p> <p>ただし、18世紀末にエジプトを旅行したクロード・エティエンヌ・サヴァリのように、ドノンが、「文明化の使命」という理念を支える、現地人を貶める見方にある程度共鳴していたこともまた認められる。たとえば、文化財の保存に関して、彼は、現地人をフランス人とは対照的な人々として描き出している。「彼ら」は文化財の価値を認めず放置あるいは破壊さえする人々である、と。「我々」が「彼ら」の代わりにエジプトを研究し、その遺物を収集して保存するのだというドノンの姿勢は、その後、エジプト学研究者や、外国の文化財の保存に取り組むフランス人あるいはヨーロッパ人に引き継がれていくだろう。</p> <p>また、本研究では、エジプト学者のうち、特にジャン・フランソワ・シャンポリオンは、旅行記に載せられたパピルスの図版をヒエログリフの解読に利用するなど、ドノンがエジプト学の発展に貢献したことや、保存すべき一部の遺物の価値が継承されていったことも確認できた。しかし、彼がコレクションの展示方法など、以後の古代エジプト美術品の管理にどの程度影響を与えたかについては、さらに研究を進める余地がある。</p>					
	使用内訳(単位:円)					
交付決定額	565,000	備品費	消耗品費	報酬	その他	旅費交通費
支出額	553,118	0	471,127	0	12,751	69,240
執行残額	11,882					
共同研究者	所属・職名		氏名		役割分担等	
	京都大学大学院文学研究科 名誉教授		杉本 淑彦		<ul style="list-style-type: none"> ・翻訳及び訳注の監修 ・論文の執筆 	